

令和5年度第1回広島城天守の復元等に関する検討会議 議事要旨

1 名称

広島城天守の復元等に関する検討会議

2 開催日時

令和5年11月30日（木）10時00分～12時05分

3 開催場所

広島市役所本庁舎2階講堂

4 出席委員等

(1) 委員

三浦正幸委員（座長）、金澤雄記委員、島充委員、塚本俊明委員、光成準治委員、山田岳晴委員

(2) オブザーバー

玉置和弘広島市郷土資料館主任学芸員

(3) 事務局

広島市市民局 市民局長、文化スポーツ部長、広島城活性化担当課長、文化財担当課長ほか
清水建設(株)、(株)文化財保存計画協会、(株)計測リサーチコンサルタント、(株)大崎総合研究所

5 議題（公開）

- (1) 広島城天守の復元等に関する検討会議開催要綱等について
- (2) 座長の選任について
- (3) 広島城天守に関する基本的な情報について
- (4) 広島城天守の復元等に関する検討内容について

6 傍聴人の人数

6人（報道関係者を除く。）

7 資料名

- ・広島城天守の復元等に関する検討会議開催要綱 資料1
- ・広島城天守の復元等に関する検討会議の公開に関する取扱要領 資料2
- ・広島城天守に関する基本的な情報について 資料3
- ・広島城天守の復元等に関する検討内容について 資料4
- ・史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準 参考資料1

8 各委員の発言の要旨

- (1) 広島城天守の復元等に関する検討会議開催要綱等について
－ 事務局から資料1、資料2を説明 －
- (2) 座長の選任について
(事務局)

- ・開催要綱第4条第1項の規定により、委員の互選により座長1人を置くこととしている。御意見はあるか。

(塚本委員)

- ・広島城について長年研究しておられ、非常に詳しい三浦委員にお願いしてはどうか。

(事務局)

- ・三浦委員を座長にとの意見があったがどうか。

－異議なし－

(事務局)

- ・それでは、三浦委員に座長をお願いしたい。三浦座長に一言挨拶をお願いしたい。

(三浦座長)

- ・御存じのとおり広島城天守は原爆で倒壊したが、もし残っていれば現存最古の天守及び豊臣大坂城の外観を最も忠実に残した天守ということで、城郭建築史上最も価値のある建造物である。
- ・その天守を復元することを目的とする会議であり、大変誉れ高いことと思っている。
- ・令和になって文化庁が出した「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」の下で、まだ天守は一例も復元されていない。基準には「復元」と「復元的整備」とがあるが、広島城大天守に関しては、文化庁の基準の「復元」に相当する資料が全てそろっており、日本で初めての復元天守になるはずである。
- ・文化庁の「復元」の基準に合致する天守は、広島城のほか、福山城、岡山城、名古屋城と4例しか無い。福山城と岡山城は、鉄筋コンクリート造の建造物を耐震補強して、取りあえず耐用年限を20年ぐらいもたせ、その後復元を検討するということである。名古屋城は、現天守を解体して木造復元をしようとしているが、諸般の事情により随分と遅延している。
- ・このように、全国の史跡における天守の復元に関しては、広島城天守が最も注目され、最も価値が高い。委員の皆様には忌たんの無い意見を頂きたい。

(事務局)

- ・ここからの議事進行は、三浦座長にお願いする。

(3) 広島城天守に関する基本的な情報について

(三浦座長)

- ・議事(3)について事務局から説明をお願いする。

(事務局)

- －事務局から資料3 前半（1 天守築造期の歴史、2 広島城天守の特徴、3 広島城天守の修復履歴等）を説明－

(島委員)

- ・用語について。
- ・今ある建物を「天守」と呼ぶとの説明があったが、やはり現代建築であって、見た目の形は天守だが機能、時代背景等が異なり、区別すべきものであると思う。実例であるが、熊本城調査研究センターでは、「天守」と「天守閣」とを意識的に使い分けている。名古屋城でもそのような使い分けがサイト上ではされている。「天守閣」という用語についてはまだこれから研究がされると思うが、現在、そういう事例がある。福山城では、今まで「天守閣」と呼んでいた現在のRC造のものを「天守」と呼ぶ流れになっている。こうした

二つの流れがある中で、どうするかということがある。

- ・もう一つ。大天守、小天守の読み方について、基本的には、小広間（こひろま）、大広間（おおひろま）のように、小を「こ」と読む場合、大を「おお」と読む。「大」が付くのは近代以降であり、古文書では「殿主（天守）」と「小殿主（小天守）」になっている。「大」を付けるか付けないか。
- ・用語は今後も使っていくので、丹念にした方がよいと思う。

（事務局）

- ・御意見の趣旨は認識している。
- ・当然、現在のRC造の建物は、歴史的建造物とは異なるものであり、区別すべきとの認識は十分あるが、今回、名称として整理させていただいたのはこの形ということである。これから議論が進んでいく中で、どういった形で用語を整理するのかということも、御意見を頂きながら検討していきたい。
- ・「大天守」についても、5重5階の建物を単独で指したいときに適切な言葉が無く、「天守群」との対比で、便宜的に使わせていただいたところがある。
- ・用語については、御意見を踏まえて検討していきたい。

（三浦座長）

- ・用語については、全国でみても随分使い方が乱れている。
- ・「天守閣」という言葉が日本で最初に使われたのは、『尾張名所図会』（天保15年（1844）刊）の名古屋城について。一般的に使われるようになったのは明治、近代のことである。江戸時代までの正式記録では、全て「天守」であって「天守閣」は無い。
- ・「大天守」という言葉も明治維新まで一切使われていない。小天守は「こてんしゅ」と読むのが正しい。大天守についてはそもそも用語が無かったのだが、姫路城において、小天守が3基建っており紛らわしいので、近代になってから「大天守」（だいてんしゅ）と名付けている。
- ・どのように呼ぶかはこれから検討すればよいが、小天守は歴史的用語なので「こてんしゅ」と呼ぶ。大天守はそもそも歴史的用語ではないため、「だいてんしゅ」と読んでも構わないが、小天守を「こてんしゅ」と読むのであれば「おおてんしゅ」と読むのが正しいかもしれない。それについても、統一してもらおうとよいと思う。
- ・他に意見が無いようなので、私の方から1点。23ページに、承応2年、大風雨により「天守台にも被害が出る」と書いてあるが、厳密には天守台ではなくて、腰郭（こしぐるわ）に被害が出ている。「天守台（腰郭）」と書くとよい。
- ・議事(3)後半について事務局から説明をお願いします。

（事務局）

- － 事務局から資料3 後半（4 主な復元資料、5 現天守の築造について、6 木造復元に関する経緯及びこれまでの調査等について）を説明 －

（光成委員）

- ・69ページの復元資料の収集・整理の項目で、令和3年度から収集しているとのことだが、この収集によって、新たな古写真などがどの程度集まったか。

（事務局）

- ・具体的に何点と答えることは難しいが、特に、古写真は、個人収集家の方々に個別に協力をお願いしますなどした結果、これまで知られていないものも含めて多く出てきている。
- ・図面や絵図についても、できるだけ高精細なデータを取得することとしており、新たなも

のと言われるとそれほど無いかもしれないが、より詳細に分かるようになったものが出てきている。

(光成委員)

- ・今回の資料の中には、新しく出たものはまだ入っていないか。

(事務局)

- ・一部入っている。例えば20ページ。天守上層部を大きく写した絵葉書で、この調査をするまで、我々の方ではその存在を知らなかった資料である。

(三浦座長)

- ・62ページについて、昭和33年に復興した現在の広島城天守は、鉄筋コンクリート造で復元された天守で最も早いものの一つである。
- ・その後、全国で非常に多くのコンクリート天守が復興されているが、かなりのものが歴史的資料に基づかない単なる想像、空想、場合によっては全く天守が無かった所に新規で建ててしまう、そういった復元とは言えないようなものまで含めてコンクリート造天守が全国に存在している状態である。
- ・そうした中で、広島城天守は鉄筋コンクリート造の外観復元ではあるが、全国に建っている復興天守の中で、最も正確に復元されたものの一つである。今考えると若干の間違いはあるが、それを認めたとしても最も正しく復元されているものである。現在の復興天守が果たした役割は、戦後の復興ブームにおいて非常に重要な例であり、高く評価できる。
- ・復興当時、空襲で多くの木造天守が焼け落ちた。コンクリートは不燃であり、永久不滅であろうという神話があって、コンクリートの天守がどんどん建ったわけであるが、65ページの耐震診断についても、少し、現天守について擁護したいところがある。
- ・Is値というのが、耐震基準を満たしているかどうかを示す一つの重要な基準で、最近よく使われている。Is値が0.6であれば健全、大地震に遭っても被害を受けないとされている。
- ・この表を見ると、現天守3階部分のIs値が0.19と0.20。これはほぼ絶望的であり、大地震があったときに倒壊若しくは大破する危険性が極めて高い。
- ・0.19という数字は全国的に見てもかなり低い方になるが、現在のコンクリート天守がぜい弱に作られているから低い値になったというものではない。天守は下から上に向かって次第に小さくなっていくため、地震の力を止めるための耐震壁を構造上、上下に通して設けることができない。だから、どうしても構造上ぜい弱になってしまう。したがって、最近、全国の天守で耐震診断をしているが、大体0.3ぐらいの数値が全て出ており、現天守だけがぜい弱なのではなく、鉄筋コンクリート造天守は全てこのような宿命にあるという認識である。
- ・現天守は鉄筋コンクリート造で、内部が近代建築となっているが、これはコンクリート造天守の宿命でやむを得ないが、外観においては最も正しく復元されているため、戦後の広島復興に対して非常に大きな役割を果たしたのは確かである。
- ・現天守が戦後に果たした役割を十分に検証して、後世に伝えなくてはならない。この素晴らしい復興天守を残してくれた広島の方たちに対して敬意を表したい。
- ・そういった点で、この天守の評価若しくは調査は非常に重要と考える。

(金澤委員)

- ・58ページの説明の時に、築城当時の姿にできるだけ近付けて復元したということで、懸魚(げぎょ)が違うという話だったかと思うが、何故懸魚を変えたのか。当時の意見や動

きは分かっているのか。

(島委員)

- ・当時、文部省から築城当時に戻すという方針があったので、そこでかなり補正というか、こうであつたらうと意見があつたようだ。
- ・例えば、1階の下見板の貼り方であるとか、懸魚、破風板についても、傷みやすい所なので修理の中で変わっているだろうというような判断がされた。設計をした方は、写真どおりではないということで、不満を持ったというような感想も残っている。
- ・また、高さに関しても、安定感を増すために少し低く造っているようで、実測図どおりに模型を作ってみると少しスマートに感じる。
- ・ただ、三浦座長が言われたように、かなり細かく写真は見ていて、57ページの設計図の1階の最も左側の狭間(さま)は、保存図には無いが、書いてある。これは恐らく写真を見てのことだと思う。
- ・このように、写真をかなり細かく読み込んで設計を行ったことは間違いない。
- ・そうした中で、築城当時の姿に戻すという目的で解釈が加えられたものと思っている。

(玉置オブザーバー)

- ・補足だが、当時の広島市職員は、文部省技官のところへ足しげく通っているいろいろな意見をもらっているということが記録に残っている。
- ・当初は原爆以前の姿に戻すという考え方だったが、途中から桃山様式という築城当時の姿を加味する動きがあつて、そのアドバイスを受けた結果、言われたような所が若干変わっていったということが記録に残っている。

(三浦座長)

- ・天守の復元に関して、保存図と写真だけでは見えない部分はかなり多くある。
- ・詳細な部分については、他の事例を参考にして実際に復元設計しなければいけない。
- ・特に懸魚等の曲線部分の扱いについて、現天守再建の時の文部省技官はかなり以前の知識に基づいて桃山時代の姿について意見をしているものなので、現在我々が思っている桃山時代のものとは大分違っている。したがって、相当な検討が必要である。
- ・原爆倒壊直前の姿に戻すのか、あるいは創建時に戻すのか。復元時点をどこにするのかというのは、文化財建造物で常に重大な議論となる。その辺も含めて今後皆さんにしっかりと議論してもらいたい。
- ・実測図面には本来柱の無い所に支柱がいっぱい書かれている。ところが、内部の写真を見ても、3階内部の写真には後世に付けられた支柱が写っているが、2階内部の写真では支柱が一切入っていない。そういった点も含めて、写真がいつ撮られたものなのか、なぜ支柱が無くなったのか、そういったことについても今後検討しなければいけない。
- ・写真に関する検討を詳細にすると非常に手間がかかるが、しっかりと検討してもらいたい。
- ・何にしても、今回の検討が大変であることを分かってもらえれば結構である。実測図面があれば簡単にできるというわけではない。
- ・大天守と南・東渡櫓(わたりやぐら)の一部については、実測図があるので「復元」の範ちゅうに入るが、東小天守と南小天守は復元資料が足りない。
- ・東小天守は外観写真が1枚あるだけで、南小天守は正保絵図に書かれているものしか無いため、「復元的整備」でやるなら、「復元」と「復元的整備」の2種類の作業が混合、複合され非常に厄介であるが、今後皆さんには一生懸命奮闘してもらいたい。

(4) 広島城天守の復元等に関する検討内容について

(三浦座長)

- ・議事(4)について事務局から説明をお願いする。

(事務局)

－ 事務局から資料4を説明 －

(山田委員)

- ・天守群の復元等に関して、蓋然性が最も重要ということだが、昨今、「活用も」という話があって、様々な方が使えるようにするという発想が要するという話がある。
- ・前提として、城の建築は、戦闘用の施設であったということがあるので、基本的に訪れる者に対して使いづらいというところがあると思う。それを体験するということが、城のだいたいご味として一つあるのではないかとも思う。

(島委員)

- ・その点は私も非常に気にしている。
- ・復元を進めていくに当たって、大きな合意形成が非常に大切だと思っている。具体的な事案において、賛成と反対で大きな衝突になるということは避けなければならない。
- ・昨今、「復元」という言葉の独り歩きということを考えていて、忠実な復元考証ができるということと、それをそのまま原寸大で建築として建てられるということとは、別の問題と考えている。
- ・「復元学」が平成になってやっと興ってきたので、まだこれからのことだと思うが、先ほど事務局から「丁寧に検討していきたい」という言葉があったが、本当に大きな課題になっていくと思っており、深く考えていかないといけないと思っている。

(三浦座長)

- ・先ほどの意見について補足する。
- ・天守はそもそも戦闘用の建物と思われてきたが、織田信長が恐らく「天主」という名を付け、そこから発展してきたものであって、初期の天守は権威の象徴なのである。恐らく天主は、天の主（あるじ）であって、天下の主、すなわち足利將軍家の象徴なのである。そのように考えると、天守は権威の象徴であって、基本的に戦闘用ではなかった。
- ・豊臣秀吉によって天下統一がほぼ達成された時期に、広島城天守は創建された。基本的には国内においても戦いが無い、要するに平和な状態になったと捉えられていた。したがって、その時期の天守は、戦いというよりも、権威の象徴なのである。平和の象徴であったといっても過言ではない。
- ・ところが、関ヶ原の戦いの後、徳川と豊臣の最終決戦を控えて軍事緊張が高まるので、慶長の築城盛況期の15年間に建てられた天守に関しては、極めて武装強化された軍事建築であった。その代表格が姫路城天守で、軍事の装備が非常に多く施されている。
- ・それに比べると、広島城天守はかなりおおらかなものになっている。これから広島城天守を再建する際に、軍事建築を再建するというアピールはあまりしてほしくない。
- ・要するに、関ヶ原の戦い以前の天守は権威の象徴で、もう戦はしないといた時代の天守であり、慶長以降の姫路城や松江城を代表とする戦闘用の天守とは一線を画すと思う。このことについてはいろいろと意見があると思うが、今後また話したい。
- ・城は昔の基準、考えで造られているため、極めて登りにくい。特に階段は狭いし、何もバリアフリーになっていない。
- ・これも全国的に議論があり、元々登りにくい軍事的な建築だったから、復元するなら登り

にくいまま再現しろという考えと、もう一つは、現代の建物であって、多くの方に見てもらうためにはバリアフリーを考えなくてはいけないという考えがあるが、この二つはうまく調和させる必要がある。

- ・天守内部に元々あった階段は、そのとおりに復元すればよいが、それだけでは避難の関係やバリアフリーの問題で都合が悪い。国宝姫路城天守においても、本来無かった階段を下から上まで造っている。国宝建築でもそうになっている。
- ・加えて、純粋に木造建築で完全復元しようとする、広島城の場合、若干耐力不足になる所が出てくるはずなので、見えない所、場合によっては見える所もやむを得ないかもしれないが、現代的構法において補強しなければいけない。そのようなことも今後検討しなければいけない。
- ・復元を「完全に元のとおり」と捉えるのではなく、現代的な復元、要するに、活用できないものは復元する価値が無いということを念頭に置いて、活用に資するように、多くの方に登ってもらえるように、足腰の悪い方でも上まで登れるようなバリアフリーの検討を十分にしなければならない。
- ・そうすると広島城天守が再建された際には、今後、四、五百年後には、最も素晴らしい素敵な復元であったと評価されるのではないかと思う。
- ・そういった点を前提に置いて、今後、検討会においてしっかりと議論してもらいたいと思うので、よろしくお願いします。

(金澤委員)

- ・8ページについて、これから石垣の補足調査をするとのことだが、調査の趣旨は石垣がどうなっているかということだと思う。近年の石垣のはらみなどの動きについて、GPSなどを使って長期・短期に渡って1ミリ動いているというような調査もあるにはあると思うが、石垣の変動について目視又は体感で感じていることはあるか。天守の下側に我々はいれないので、石垣のはらみが出ているかどうか、現在、感じていることがあるか。

(事務局)

- ・天守台石垣の健全性の評価は、まだ行っておらず、検討中である。
- ・今回の補足調査はそういったものではなく、より詳細に石垣のデータを取っていく趣旨のものである。

(島委員)

- ・調査について、平面形状を確認するのか。平面図の作成は念頭にあるか。現在、実測図の1階平面が遺構と合っているのかが分からない状態であり、図面の精度の評価にもつながると思う。東小天守、南小天守についても、現在は正確な平面形状が分かっていない。
- ・また、古写真の天端石や詰石の数を正確に数えているが、天端のラインが当時のままであるのかといった評価も今後必要になってくると思う。こういったことも念頭に調査を行うということによいか。

(事務局)

- ・基本的には、3Dモデルを作成する上で、実測データを積み重ねていくものであり、平面形状も分かる形になる。それをどう扱うかということかと思う。
- ・資料3の68ページで示したように、令和3、4年度に行った石垣現況調査でも、既に3Dモデルは作っており、平面が3D上で再現できる状態ではある。

(三浦座長)

- ・天端石の欠落若しくは取替え等については、現在、詳細な石垣カルテの作成が進められて

いる。カルテが作成された後、古写真によって分かることもあるだろうし、石垣天端の形状については今後しっかりと検討し、提示してもらいたい。

- ・他に質問が無いようなので、以上で今日の議事は終了とする。事務局の方で何かあればお願いする。

(事務局)

- ・本日頂いた御意見を参考に広島城天守の木造復元に向けた調査・検討を進めていきたい。
- ・次回の検討会議については、日程等確定していないため、追って連絡させていただきたい。
- ・必要に応じて委員の皆様個別に相談させていただくこともあろうかと思うので、御指導・御協力のほどよろしくお願いする。

(三浦座長)

- ・これをもって、令和5年度第1回広島城天守の復元等に関する検討会議を終了する。